

# 学会の本質としての Analytical Sciences



壹岐伸彦

本年3月に Analytical Sciences の副編集委員長を久本先生から引き継ぎました。同誌に玉稿をお寄せいただき、またご査読いただく会員の皆様にはこの場を借りて厚く御礼申し上げます。ご承知のように同誌は科研費の支援を受け、国際的な情報発信力の強化に向け up to date な特集号の企画や優れた総説の掲載、国際会議との連携や電子メール配信による PR、海外編集委員の創設など、新しい取り組みを行っています。皆様には同誌に掲載された論文の積極的な引用をお願いしております。こういった施策を実効性のあるものとするべく小澤委員長のリーダーシップの下、編集委員会では WG を結成して取り組みを推進しています。同時に Quality First のモットーを掲げ、論文の質を向上させる丁寧な査読を心がけています。科研費による対策と編集委員・審査員の地道な努力で Anal. Sci. の国際的な情報発信力は向上すると確信しています。しかしそれにも増して会員の参画意識が必要と考えています。

会員の皆様、Analytical Sciences に対して率直にどのような印象をお持ちでしょうか。投稿する立場として「優れた成果は Analytical Chemistry か Analyst に。それほどでもないのは Anal. Sci. に」あるいは「これは Anal. Sci. にはもったいない」と思うことはないでしょうか。引用する立場としては「Anal. Sci. の論文か…」と断じてしまうことはないでしょうか。良い論文は権威のあるジャーナルに投稿したい、という気持ちは誰も思い抱くことでしょう。掲載されたいけれども引用されない論文が Anal. Sci. に存在することも否めないでしょう。こういった現実の下、良い論文を同誌に投稿するのは合理的な判断ではなくなります。しかし皆がこの固定観念に縛られている限り現実はいつまでも変えられないでしょう。Anal. Sci. の情報発信力向上にはプロモーション策や編集委員・審査員の丁寧な査読だけではなく、日本国内からの Quality の高い論文の投稿が必要不可欠です。つまり「Anal. Sci. か…」という過小評価をやめ、私たちこそが Anal. Sci. を Anal. Chem. や Analyst と肩を並べる分析化学総合誌に育て上げるのだという意識を共有したい。皆が意志的に良い論文を投稿するようになれば、もはや良い論文の投稿をためらう理由はなくなります。

そうは言ってもという方には現実的なお願いを致しましょう。論文を商業誌に投稿するのであればなるべくそれをやめ、Anal. Sci. にご投稿ください。また Anal. Sci. 掲載の論文を積極的に評価し引用してください。これらを<sup>すべて</sup>全ての会員が10年、20年継続すれば、少なくとも商業誌には劣らないプレゼンスを示すことになるのではないのでしょうか。

他誌もプロモーション活動や質の高い論文の呼び込みに努力しており、「ジャーナル戦国時代（小澤委員長、ぶんせき 2015(9)）」のただ中です。科研費の支援が終了しても Anal. Sci. が持続的に成長し続ける体力作りが今、求められています。30 数年前先人達は、良い原稿の持続的な確保、編集業務の労力や財政的な問題などの不安と戦いつつ、Anal. Sci. 刊行に踏み切りました。彼らを動かしたのは「分析化学が学問的に正しく認知されるには英文誌の保有が必要」、「英文誌を保有しなければ学会としての本質を失う」との使命感でした。Anal. Sci. は私たちの学会や学問領域の本質を表すものなのです。100 年後アジアの中心で Anal. Sci. が分析化学研究の発信・交流の場としてしっかりと存在し続けられるように、皆様の意識的なご協力をお願い申し上げます。

〔Nobuhiko Iki, 東北大学大学院環境科学研究科, 「Analytical Sciences」副編集委員長〕